

↑

風汰が通う明功中学校では、二年生の六月に五日間の職場体験が行われる。体験先は、地元の商店から大手のホテル、コンビニ、ファストフード、介護施設などなど。そのなかから興味のある職場を選び、希望を出す。

学年全体がどこか浮き足立って、職場体験の話題一色になっているけれど、風汰はまったく興味をもてなかった。

「頼んでまでして、なんで仕事しなきゃなんないの？ しかもただで」

というのが、風汰の理屈だ。

「なあ、オレの話聞してる？」

「ん？ あ、なに？」

「だから、職場体験。授業よりマジじゃん」

駅前のファストフードに希望を出している吉岡は、風汰の机に肘をつけてぐいと身を乗り出した。

「ハンバーガーとか、ただ食いできるらしいよ。あっくん先輩が言ってた」

「ふーん」

「風汰も一緒に行こうぜ」

「やだ」

「なんで」

「べつに、ハンバーガー食いたくないし、将来マックに就職するつもりないし、スマイルくださいなんて言われたら

死にたくなるし」

吉岡は風汰の顔をまじまじと見た。

「風汰ってさ、いーかげんなのか、真面目なのかビミョーだよな」

「なんだよそれ」

その時、教室のドアが開いて担任の石塚が顔を出した。

「やべっ」

風汰が吉岡の影に隠れるより早く、石塚が声をあげた。

「斗羽、斗羽風汰」

ちよいちよいと人差し指を動かす。

「マジか……」

がががっとな音を立ててイスをひく。

「なんすかあ」

「なんすかじゃないだろ、あれ、希望先カード、今日で締め切るからな」

「ういゝす」

「カードが出ないってことは、どこでもいいんだと判断する。いいな、オレが決めるぞ」

「へっ？ なんで？ やだ！」

「だったらさっさと決めろ」

石塚はにやりと笑って、背中を向けた。

先生が決めるようなところは、とてつもなく退屈か、途方もなく大変かのどっちかに決まってる。